

LGBT 「ごめんね」といわなければならない現実を変えたい

福岡キャンパス 助産分野 M1 吉元 香織

私は、友人に LGBT がいるため、健太郎さんのお話を聞きながらその友人の顔が浮かんできた。

その友人は高校時代同じ部活仲間であったトランスジェンダーの A 君（当時は A さん）である。3 年間クラスは違っていたのだが、勉強もできてスポーツも万能で、明るく周りの友人に気を遣い、思いやりにあふれた優しい人だった。周りには、いつもたくさんの友人がいた。

そんな高校 2 年生の時、A 君は、当時の一番の親友に自分がトランスジェンダーであり、その親友に好意を抱いていることをカミングアウトした。親友はひどく動揺し、受け入れられず A 君を避けるようになった。

それだけでなくそのことを周りの友人に話したことで A 君のことはたちまち学年中に広がり、教室だけでなく部活内でもその話題で持ちきりになった。理解を示したり A 君のことを心配したりする人はごく僅かだった。面白おかしくある事、無い事を噂する人、興味が無い人、ほとんどがこのどちらかであった。しかし、それよりも A 君にとって一番辛かったのは、信頼していた親友に受け入れてもらえなかったことだったのではないか。

それから半年ほどは、理解を示した数人のクラスメイトと一緒にいた A 君だったが、そのクラスメイトとも距離を置いているような感じで、だんだんと部活にも来なくなった。そして高校 3 年生になると、クラス替え後のクラスに馴染めず、以前は熱心に頑張っていた部活を退部しただけでなく、学校もよく休むようになった。

その頃私は、A 君のことが気になりつつも、自分から話しかけたり、連絡をとったりすることはなかった。今思えば、「受験勉強で忙しいから」「クラスの違う私には何もできることはないだろう」「どうやって関わればいいのか分からない」などという“言い訳”ばかりを並べ立てて、何もしない自分を正当化していたのだと思う。

大学受験が終わり、卒業式の日。A 君の姿はなかった。もう二度と A 君に会えないかもしれないと思うと、何も出来なかったというより、何もしようとしなかった自分に苛立ちを覚えた。

そして 3 月下旬に行われる辞任式の日。辞任式は、卒業後であるため高校の制服ではなくスーツで来るのが慣例となっていた。

会場に A 君が男性用のスーツを着て体育館に入って来たとき、その場にざわめきが起こった。しかし、それを気にする素振りも見せず、A 君は凜とした表情で真っ直ぐに前を向いて私が並んでいる横の列に来た。

何か言わなければ私はずっと後悔するかもしれないという思いと、A 君が辛かった時それに気づいていながら何も出来なかったことに対するの申し訳なさ、今さらなんと声をかければいいのか分からない気持ち、色々な感情が入り混じった状況で出てきた言葉は、「スーツ姿、かっこいいね。あとで一緒に写真撮ろうね」というものだった。

A 君は少し驚いた顔の後ににっこりと笑い、「ありがとう」と言った。そして私と数名の友人が A 君と写真を撮っているのを見た他のクラスメイトは、続々と A 君と写真を撮りだした。その光景を見て、嬉しいような、悲しいような、悔しいような、言葉では言い表せない思いを感じた。それが、健太郎さんのお話を聞いて少し明確になったような気がした。

結局は、A 君の本質や性格が問題なのではなく、性の多様性に対する日本の社会の理解が、つまり私たちの受け入れが不十分であることが問題なのだ。

卒業後、A 君はアメリカへ留学した。SNS で友人に囲まれていつも笑顔で写っている A 君の写真をみると、嬉しい半面、少し悲しくなったりもする。私たちには出来なかったことだからだ。日本という保守的な国柄のせいにはばかりするつもりはないが、それは大いに関係していると言える。

A 君とは今でもお互いの誕生日には必ず連絡を取り合ったり、SNS の投稿にコメントをし合ったりしているが、高校時代のことを思い返すと申し訳ない気持ちでいっぱいになる。しかし、辞任式の日、自分から話しかけた私は、以前の私よりもほんの少しだけ成長できたのかもしれない。

健太郎さんが自身の母親に自らのことを話すとき、「ごめんね」と言わなければならなかったと知り、それが今の日本の現実であると痛感しただけでなく、A 君はどうだったのだろうかと思う。

自分の気持ちに正直に生きるのに家族に謝らなければならない、そんな悲しいことがあるだろうか。パートナーが HIV であると分かった際、自分も同じ病気だったらいいのにと思ったということであったが、私を含め現代のカップルでそれほどまでの強い絆を持っているカップルはどれぐらいいるのだろうか。

これからの社会が変わるために何をすべきか、ということは、私にとってはスケールが大きくて分からない。しかし今回の講義で、「男だから」「女だから」ということにとらわれず、その人自身を見つめ、受け入れ、理解し、愛せる人間に私もなりたいたいと考えた。